

輝く断片に 魅せられて

みごとな輝きを放ってくるのだ。

じっさい、わたしたちが映画に魅せられるとは、まずはその映画の、どこかの小さな部分・断片をおもしろがることから、始まるのではないか。

フランソワ・トリュフォー監督「トリュフォーの思春期」は、そうした魅惑の断片集みたいな映画だ。べつに筋らしい筋もない。フランスの小さな町を舞台として、ヨチヨチ歩きの幼児から、ワンパク坊主、初恋の少年少女まで、十数人の子どもたちの日常生活を、ただ淡々と描き出す。まとまったストーリーなどはなく、エピソード集だ。台詞も、ごく日常的な会話だけで、それもきわめて少ない。

たとえば、ある少年の姿はこうだ。
小学校の五年か六年くらいか。端正な目鼻立ちのその少年は、いつも黙りがちで、ニコリともしない。大きな瞳は輝いているけれど、どこか暗さを宿しているように見える。この少年が自宅から通学するシーン。雑草に埋まった粗末な小屋みたいな家から、彼が出てくる。と、まるで少年を追い払うように、家のなかから、ヒステリックな女の声が響く。この通学風景が何度か描かれるうち、どうやらうるさい祖母と母親に、この少年がいつもいじめられているらしい、とわかってくる。

ただそれだけだ。わたしたちは、台詞やナレーションで説明されるわけではない。また少年がみじめつたららしい表情を

●西脇英夫の映画評論集『アウトローの挽歌』(白川書院)を読んだ。なかなかおもしろい。副題に「黄昏にB級映画を見てた」とあるとおり、いわゆるB級映画Ⅱプログラムピクチュアをのみ、情熱的に論じた本だ。その姿勢は偏執的とさえいえるほどで、ものすごい数の映画作品が論じられるのだが、普通だれもが「名作」と呼ぶ映画は、徹底的に無視されている。

こんなにもまでアンチ・名作主義に徹して戦後映画を語った本は、いままでに一冊もない。痛快かつユニークである。この本を読んだ者はおそらく、こう感嘆の声を発するにちがいない。わが日本の戦後映画史には、いわゆる「名作」の陰に葬られて、これほど豊かにもおもしろい映画群がいつばいあったのか、と。

《一体、人生に残る一編とは、黒沢や木下や溝口や小津などの作品だけだろうか。少女時代に見た『狸御殿』や、幼年期に見た『七つの顔』であってなぜいけない。否、そうした作品のワンシーン、ワンカットだけが妙に深く心に残っていることになぜ批評の目を向けないのだろうか。》

西脇英夫の姿勢は、この「あとがき」の一節によく示されている。

ワンシーン、ワンカットへの強烈なこだわり。西脇英夫はそこから出発する。この本のどこを開いてみても、アクシオン映画やチャンバラ映画の魅惑のワンシーン、ワンカットが、